ゆく年を大合唱で送る幸福

年の瀬が迫ると日本のあちこちからベートーヴェンの第九が聞こえてきます。この曲がクラシック音楽の傑作の一つであることは万人の認めるとこでしょう。最後の最後に湧き上がる大合唱「歓喜の歌」は，迎える新年に希望を見出す，まるで生命への賛歌の如き響きであります。なるほど，それで年末に演奏されるのかと思いきや，そうでもないようです。

第九が年末に定着したのには，日本のオーケストラ団員の寒い懐事情があったようなのです。なかなか稼げぬオーケストラ団員。どうにかして餅代を捻出せぬことには年越しもままならない。それでこの大曲で一稼ぎ……と企画したのが事の始まり。合唱団を雇うと経費もかかるので，地方公演などは４人の歌手を連れて行き，地元の合唱団と共演する。これが結構集客力もありなかなか良い。こうして，日本の暮れの風物詩が生まれたようなのです。もちろん，第九の素晴らしさあればこそですが。

この時季に相応しい曲と言えば，第九よりヘンデルの「ハレルヤ・コーラス」ではないでしょうか。この曲は，オラトリオ※1「メサイア」の一曲で，キリスト（メサイア＝救世主）の復活を祝う大合唱です。この曲こそクリスマスの頃にぴったりのはずですが，演奏サイズから言えば第九の半分以下で，雇用確保の観点から見て採用を見送られたのかも知れません。という事で，日本の暮れは，やはり第九に決まりです。

私ごとで恐縮ですが，30 代初め頃，年末からお正月にかけて英国スコットランドはエジンバラに旅したことがあります。彼の地で英国人の友人が大晦日の夜のコンサートチケットをプレゼントしてくれました。大晦日にどんな演奏会なのかと楽しみに会場へ向かったのでした。

ところが，演奏されるのは聞いたことの無い曲ばかり，それでもスコットランド民謡なのか，地元の人気歌手なのか，ホールは盛り上がって熱気ムンムン。そのせいか，休憩になるとステージ前でアイスクリームの販売が始まったではありませんか。ホール内の飲食 OK ってことは，吉本のグランド花月か宝塚劇場のような会場だったのかも知れません。

その夜の演奏もそろそろ終わりかと思う頃，初めて耳慣れた旋律が流れ，客席は総立ちに。身体の前で腕を交差させ，見知らぬ隣席の客同士が手と手をつないで大合唱。英語の歌詞に混じって日本語で歌うのは私と妻の二人だけ？

「ほ～た～るの～ひ～か～ぁり，ま～ど～の～ゆ～ぅき～」そう，その歌こそスコットランド民謡「蛍の光」。

どんな曲であれ，年末に大合唱できるなんて幸福なことです。来る年が皆様にとっても幸福な年となりますように。

※1…「オラトリオ」とは聖書を題材にした宗教的合唱曲のこと